

丹後と畿内の弥生勾玉

小山 雅人

1. はじめに

縄文時代ほど変化に富まず、古墳時代ほど定型化していない弥生時代の勾玉は、材質・形態の両面で分類が比較的容易である。空間軸を西は九州、東は青森県まで、時間軸を稲作の開始から巨大な前方後円墳の出現までに取り、出土資料をこの座標に並べてみるという作業を行ったことがある^(注1)(1991年)。その結果、縄文的あるいは新出の半島的な形態の勾玉が全国各地で日本化とでも言うべき多様な形を展開し、やがてそれも北部九州で出現した定型的な勾玉に統一されていくと列島も古墳時代を迎えるという大きな流れを確認することができた。また、近畿地方に限った分布変遷図を作成し、近畿を旧国別に概観し、丁字頭勾玉やガラス勾玉の変遷、北九州から瀬戸内、紀伊に分布する後期の蛇紋岩製勾玉について考察した^(注2)(1992年)。

それ以来、10数年が経過し、勤務先での業務も変わる中、毎日のように届く全国の報告書のチェックすら滞ってしまった。それでも大和唐古・鍵遺跡第53次(1993年)、豊前徳永川ノ上遺跡(1996年報告書)、河内鬼虎川遺跡第44次(1999年)、因幡青谷上寺地遺跡(2001年)、大和唐古・鍵遺跡第80次(2001年)、越後坪之内遺跡(2002年)、河内城遺跡(2003年)、肥前中原遺跡(2003年)といった重要な調査成果は、不勉強な筆者の目にすら触れ、またありがたいことに成果をご教示くださる方々もあった。しかし何よりも、筆者の勤務先のフィールドである丹後各地で弥生後期の墳丘墓が相次いで発見・調査されたことが大きい。鉄器とともにふんだんに副葬された玉類は、この地域を従来の「丹後王国」という異名に加え、弥生後期に限っては「鉄とガラスの王国」とでも呼ぶべき様相を呈してきた。極め付けは、2000年の赤坂今井墳丘墓の調査である。

本稿は、資料的な準備はまことに貧弱ではあるが、前回の近畿地方の変遷図の改訂版を示した。地理的範囲は、播磨・但馬と紀伊、及び近江地方は、資料の都合で省き、いわゆる「畿内」と丹後・丹波(本来の丹波国)地域に限った。本稿表題の所以である。

この10年では、畿内でも大型の勾玉の出土が目立った。全国の資料に目を通したというには程遠いが、一応ここで触れておきたい。

1993年に出土した武蔵(東京都板橋区)四葉地区遺跡の全長7.4cmの翡翠勾玉^(注3)が現在日本最大の弥生勾玉である。ところが1998年12月4日の産経新聞朝刊で、池上曾根遺跡から昭和47～48年の住宅建設に伴う調査で大きな勾玉が出土していたと報じられた。この翡翠勾玉(第1図85:写真トレース)は、全長こそ6.3cmで豊前(福岡県北九州市)岡遺跡例と並んで2位であるが、120gという重さは、四葉例の84.5g、岡例の81.6gをはるかに凌ぎ、実質的に日本最大の勾玉と言えよう。

唐古・鍵遺跡第53次の当時弥生期全国3位と報道された5.2cmの翡翠勾玉^(注5)(91)は、実は8位である。この辺りまでが、5cm以上で超大型とできる。同遺跡第80次の褐鉄鉾容器に入っていた2点の翡翠の勾玉^(注7)(89・90:写真トレース)の内、大きい方は全長4.64cmで17位である。越後坪之内遺跡例^(注8)の4.7cmと因幡青谷上寺地遺跡^(注9)の4.6cmが大型という分類に入る。写真で見ると限り肥前(佐賀県唐津市)宇木汲田遺跡^(注10)や同(長崎県平戸市)根獅子遺跡^(注11)の丁字頭勾玉に似た印象の肥前(佐賀県唐津市)中原遺跡^(注12)の2点は、同じく4cm台前後であろうか。

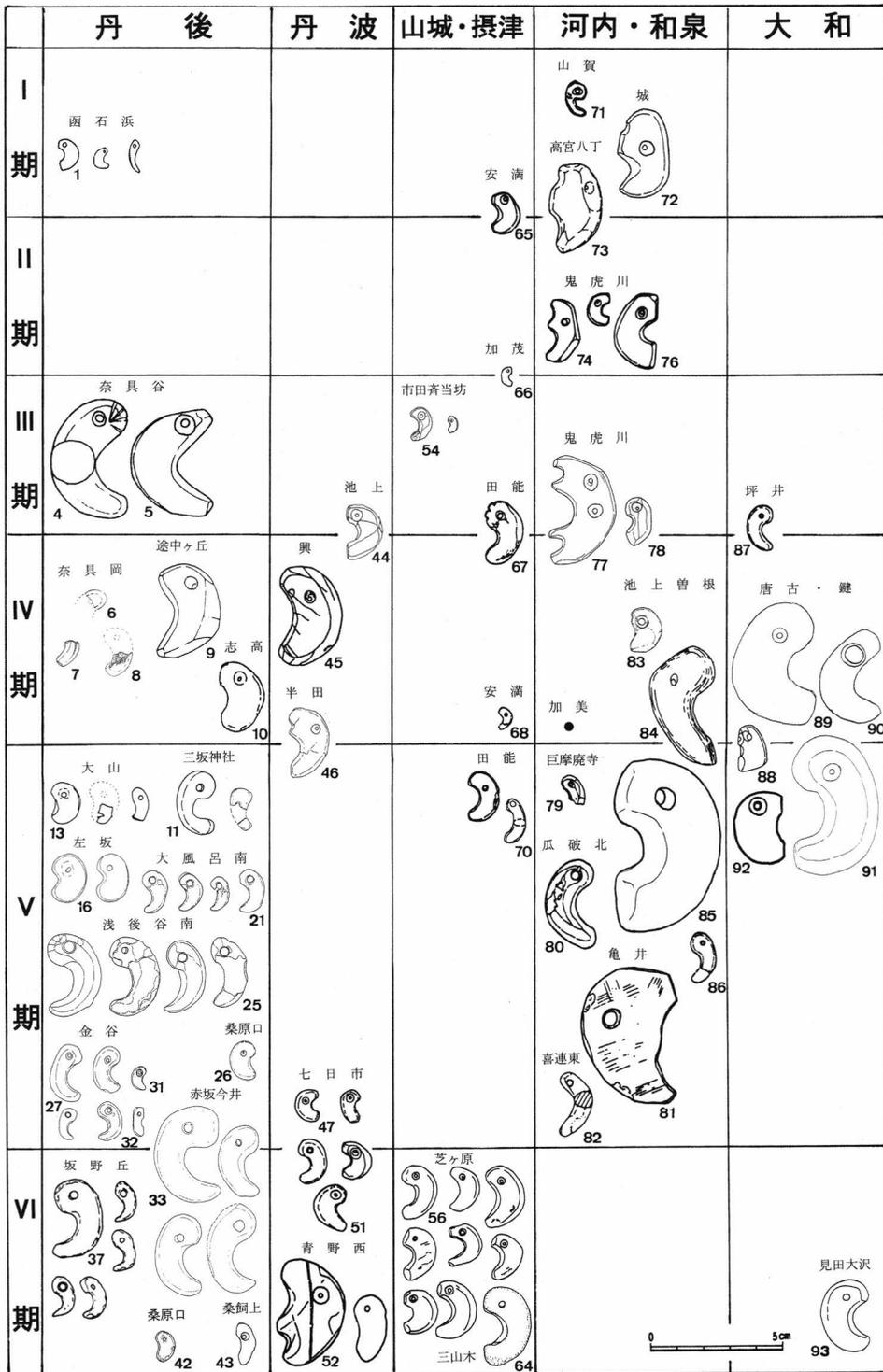
2. 大和の弥生勾玉

この10数年で最も様変わりしたのは大和地方である。旧稿で「弥生勾玉は4例に過ぎず、質量ともに貧弱な印象は否めない」と書いたが、先に触れた唐古・鍵遺跡第53次と80次の超大型・大型・中型の3点は、大和地方ないし唐古・鍵という大遺跡に相応しい翡翠勾玉と言えよう。超大型・大型の2点に共通する形態的特徴として、丁字頭でなく素頭で、全体に太短い東日本の印象にも拘わらず、腹部から尾部への変換点に明確な屈曲が見られることである。これは中期中頃に出現する北部九州の大型丁字頭勾玉に見られ、古墳時代前期まで続く特徴である。勾玉の定型化を考える際、中期後半～後期初頭の大和地方に北部九州と共通する形態的特徴が見られるのは極めて興味深い。

もう1点、唐古・鍵遺跡第91次調査の翡翠勾玉^(注14)(92:写真トレース)がある。長さ2.74cmの半球状勾玉で、後期初頭の砂層から出土した。腹部の挟りが小さく孔が高い位置にある形態は、出雲(鹿島町)古浦遺跡^(注15)の前期の配石墓から出土した例を想起させる。唐古・鍵のこの調査では中期前半の方形周溝墓が検出されているが、この古式の勾玉は本来この墳墓(とまでは言わずとも中期前半という時期)に関係するものと解釈したいという誘惑に勝てそうにない。

3. 摂河泉の弥生勾玉

和泉地方では、先に触れた重量ないし体積で日本一となった池上曾根遺跡の翡翠の大勾



第1図 丹後と畿内の弥生勾玉の変遷

玉がある。同じ遺跡の掘立柱建物跡棟持柱跡から出土した翡翠勾玉^(注16)(83)が小型で不定形を呈しているのに対し、こちらはやや丸みを帯びて日本化した半球状勾玉で、やや古風な形ながらこの弥生時代の大遺跡を象徴する遺物といえよう。

河内地方では弥生時代前半期に属する獣形勾玉の出土が相次いだ。この地方では以前から寝屋川市の高宮八丁遺跡^(注17)(73)と東大阪市の鬼虎川第7次調査^(注18)(74)でこの種の勾玉が見られたが、四條畷市の城遺跡^(注19)(72)で前期の、鬼虎川遺跡第44次^(注20)(77)で中期の例が加わった。城遺跡例は不定形で上側の挟りが小さい。丹波半田遺跡の新出例(46、後述)に似ているし、高宮八丁遺跡例(73)に通じるとも言えよう。鬼虎川遺跡の新例は管見では例を見ない形態である。獣形勾玉とは全体に半円形ないし半球状を成し、頭部と尾部に加え腹部に第3の突起が見られるものを言うが、この例は半球状勾玉の同形の頭部と尾部のそれぞれに小さな腹部を成す挟りがある。従って半球状勾玉の一変形とも見られる。更に孔も2ヶ所ある。河内地方に4点もの獣形勾玉が見られるのは、地域性の一つなのであろうか。

4. 山城の弥生勾玉

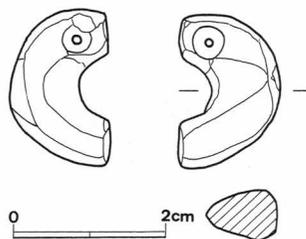
山城地方ではVI期の芝ヶ原古墳例^(注21)(56~63)以外に弥生勾玉が見られなかったが、ようやく久御山町の市田齊当坊遺跡で小型(54、1.3cm)と超小型(55、0.6cm)の2点の翡翠勾玉が出土した^(注22)。この遺跡は従来全く知られていなかったが、調査の進展とともに一大弥生遺跡となった。玉作りも行われ、石剣なども多く出土する。山城地域の拠点集落であり、今や基準遺跡でもある。それにしても、山城地方の北西の一画を占める乙訓地域では、長岡京跡を擁することもあり、広く発掘調査が行われ、弥生遺跡も少なくないにも拘わらず、奇妙にもこと弥生勾玉に関してはいまだ出土例を聞かない。

京田辺市の三山木遺跡例(64)は、遅くとも古墳前期以前とされる資料^(注23)である。西日本の弥生後期から庄内式併行期に見られる形態から、この位置に置いてみた。

5. 丹波の弥生勾玉

丹波では、まず南丹波八木町池上遺跡の半球状勾玉^(注24)(44)に注目してみよう。本来の半球状勾玉はドーナッツを半分にした頭尾同大の形をしている。切った面はシャープな平面でその形は内側(勾玉の腹側)が直線的で外側(同じく背側)が半楕円で丸い。朝鮮半島の青銅器時代の遺跡からはこのような天河石(アマゾナイト)製の半球状勾玉^(注25)が出土する。曲線と直線、曲面と平面が交差する美的表現として優れたものである。列島の弥生時代遺跡から出土する半球状勾玉はいずれも多少の差はあれ日本化している。角が取れ、丸みを帯びたものになり、下部、つまり尾部が小さく細くなっていき、やがて古墳時代の定形の勾玉

になっていく。池上遺跡の例(第2図)は、一見通常の半珠状勾玉に見えるが、重大な原則破りがある。勾玉の断面の背側が直線的で腹側が半楕円の曲線になっているのである。勾玉の体部にはまだ稜線が残り、未完成品とも見られるが、妙に完成された印象を与える。この後多少の研磨工程が残っていたとしても、断面の逆三角形が反転することはないと判断できる。多くの列島製勾玉が断面隅丸方形



第2図 池上遺跡出土勾玉
(注24文献第22図177を改変)

になって行く中、池上遺跡例は正反対とは言え、断面の半楕円と直線を守り、曲面と平面を合わせもつ本来の半珠状勾玉の形の心を残していると言えよう。

中丹福知山市半田遺跡^(注26)の獣形勾玉(46)は、先に触れたように河内の城遺跡(72)・高宮八丁遺跡例(73)に似ている。和泉池上曾根遺跡の柱穴から出土した勾玉の頭部にも似たような窪みがある。摂津田能遺跡例^(注27)(67)は通例丁字頭勾玉とされているが、縄文時代の鶏冠状^{とさか}刻みの系譜を引いているとも見られる。半田遺跡例などはその変形かも知れない。

6. 丹後の弥生勾玉

丹後地方の弥生勾玉は前期の有名な函石浜遺跡^(注28)(1~3)にはじまるが、奈具谷遺跡(京丹後市弥栄町)の中期中頃とされる丁字頭勾玉^(注29)(4)に注目したい。北部九州を離れると、この時期まで遡る丁字頭勾玉は報告されていない。石見(六日市町)前立山遺跡^(注30)の後期中頃の例が奈具谷に続き、後期(第V期)後半から第VI期にかけて吉備(倉敷市)楯築遺跡^(注31)ほかで丁字頭勾玉が散見する。これら墳丘墓の例を引き継ぐのが豊かな副葬品の前期古墳で、丁字頭勾玉の例が爆発的に増えることは、今更述べるまでもない。材質はアプライト(半花崗岩)で軽量ではあるが、奈具谷遺跡の丁字頭勾玉は、先に別の系譜かとした摂津(尼崎市)田能遺跡例(67)を除くと弥生時代の近畿地方では唯一例なのである。材質が翡翠であれば、北部九州から直接持ち込まれたとも解釈できようが、軟質の石が使われていることは、むしろ丁字頭という形態ないし意匠、つまりひとつの思想が人から人へ伝わったことを示唆しているようで、極めて興味深い。

中期後半になると奈具谷遺跡に隣接する奈具岡遺跡(京丹後市弥栄町)では水晶玉の生産が盛んになる。ガラス玉の再加工も行われていたとみえて、水晶勾玉^(注32)(7)や棗玉のほかにはガラス勾玉(8)が持ち込まれていることが最近の再整理で判明^(注33)した。ガラス勾玉としてはかなり古い時期であるにも拘わらず、胴部中程の断面はほぼ円形で、尾部先端も面を持たず、上方ですぼまったバナナの先端状に終わるなど、頭部が不明ながら北部九州でこの時期にみられる定型式と言ってよい。また、この遺跡では翡翠勾玉(6)も小片であるが、確

認(注34)されている。

弥生時代後期の墳丘墓が丹後地方で相次いで発見され、鉄製武器やガラスの装飾品を主体とする副葬品が出土したことについて詳しく述べる余裕はない。ここでは勾玉の出土例に限って埋葬主体単位で示す。

1	京丹後市大宮町	<small>みさかじんじゃ</small> <small>(注35)</small> 三坂神社墳墓群	3号墓第10主体	1点(鉛バリウムガラス)
2	同	同	3号墓第2主体	2点(鉛バリウムガラス)
3	同	<small>ささか</small> <small>(注36)</small> 左坂墳墓群G24-1号墓	第9主体部	4点(カリガラス)
4	同	同	25号墓第9主体部	1点(カリガラス)
5	同	同	26号墓第1主体部	2点(鉛バリウムガラス)
6	京丹後市丹後町	<small>おおやま</small> <small>(注37)</small> 大山墳墓群	5号墓第2主体部	3点(鉛バリウムガラス)
7	同	同	8号墓第2主体部	1点(鉛バリウムガラス)
8	与謝郡岩滝町	<small>おおぶろみなみ</small> <small>(注38)</small> 大風呂南	1号墓第1主体部	10点(鉛バリウムガラス)
9	京丹後市網野町	<small>あさごだにみなみ</small> <small>(注39)</small> 浅後谷南墳墓	第1主体部	5点(鉛バリウムガラス)
10	同	同	第4主体部	1点(鉛バリウムガラス)
11	京丹後市峰山町	<small>かなや</small> <small>(注40)</small> 金谷1号墓	第2主体部	2点(鉛バリウムガラス)
12	同	同	第3主体部	3点(鉛バリウムガラス)
13	同	同	第11主体部	7点(翡翠1・滑石6)
14	同	<small>あかさかまい</small> <small>(注41)</small> 赤坂今井墳丘墓	第4主体部	28点(鉛バリウムガラス)
15	京丹後市弥栄町	<small>さかのおか</small> <small>(注42)</small> 坂野丘遺跡	第2主体部	6点(鉛バリウムガラス)

遺構の時期を、丹後の後期をI～IV期に細分した高野編年(注43)で示すと、1と2が後期I、3～7が後期II前後、8が後期III期、9～14が後期IV、15は庄内併行期Iとなるようである。

これらの墳墓から出土した勾玉は、金谷1号墓第11主体部の翡翠製品1点(32)と滑石製品6点(31)を除いて、いずれもガラス製品である。形態は、三坂神社の例がまるで博多平野の例えば須玖唐梨遺跡あたりからの直輸入かと思わせる定形式であるのに対し、大山(13～15)や左坂(16・17)の例は丹後丹波の中期勾玉の形態をそのままガラスに移したかのようである。しかし、大風呂南1号墓以降、完全に定型化しており、弥生的な要素を多分に残す山城の芝ヶ原古墳の翡翠勾玉群(56～63)と好対照である。丹後を離れるとガラス勾玉自体がかなり珍しいものになる。摂津安満(68)、河内加美(第1図ではドットのみで示す)・巨摩廃寺(79)、和泉池上曾根(86)、大和唐古・鍵(注44)(88)などの例が知られるに過ぎな

い。丹後-安満-唐古・鍵は、弥生時代のガラス勾玉の東限でもある。ガラス管玉88点・碧玉管玉93点のなかに30点もの大小の緑色勾玉を鑲めた赤坂今井(33~36)の「玉鬘」と呼ぶべき頭飾りや耳飾りのキラキラしさは、当時の倭国列島では比類のないものであったろう。しかしながら、前稿でも述べたように、弥生時代中期末から庄内式併行期(IV~VI期)において、九州北半部から中四国・近畿地方に分布するガラス勾玉は、瀬戸内を中心に分布する蛇紋岩製勾玉とともに、いずれも翡翠勾玉の代用品と考えられる。^(注45) 金谷1号墓第11主体部から出土した全長1.1cmの勾玉(32)は、弥生後期及び庄内期の丹後で唯一の翡翠製品なのである。丹後の弥生後期文化を象徴する玉製品が、その製作にいかにも高度な技術を要するとは言え、イミテーション・ジェイド(偽ヒスイ)であったことも認識しておかねばならないであろう。



第3図 赤坂今井墳丘墓第4主体部出土玉類装着復元図(注41文献より転載)

7. 勾玉の役割

赤坂今井墳丘墓第4主体の「^{たまかざら}玉鬘」は、勾玉の本質についても示唆してくれる。第3図は報告書に掲載された玉鬘(頭飾り)と耳飾りの復原想像図である。注目したいのは額部分の勾玉である。この部分の勾玉はぶら下がらずに、紐によってバンドナに押さえ付けられ、尾部が立っている。この状態から連想されるのはまさに^{かぎ}鉤である。勾玉の形について最もその本質を突いたのは金閔丈夫である。勾玉は、魂が体から抜け出るのを防ぐ、あるいは外部から侵入して来る邪霊を引っかける魂の^{こうきんぐ}拘禁具であると明解に述べ、考古遺物として勾玉のほかに巴形銅器や鉤のある銅釧を^(注46)挙げている。一方、小方泰宏は、岡遺跡の翡翠製丁字頭勾玉の報告のなかで、勾玉の正面は、C字曲線の内側、丁字頭の刻線が見える腹側と^(注47)考えた。付け加えれば、普通に紐を通して首に懸けると、勾玉の尾部が胸から前方に突き出すのである。決して逆に着けてはいけぬ。これが逃げ去る魂を捉える鉤であることを見せるために、尖った尾部は外に向かわねばならない。唐古・鍵遺跡の大型の勾玉のところで述べた胴部と尾部の境の屈曲は、鉤という形態を強調する要素である。このように見て来ると、^{いばら}荊の冠を被っているようにも見える赤坂今井の被葬者は、多くの鉤、つまり魂拘禁具で呪術的に何重にも護られていたのである。

遺物の実見や本稿の作成にあたって、多くの方々のご協力をいただいた。とりわけ菅原章太氏(東大阪市教育委員会)、野島稔氏(四條畷市教育委員会)、豆谷和之氏(田原本町教育委員会)、大嶋健司氏(佐賀県教育委員会)、そして職場の同僚の岡崎研一・高野陽子・寺尾貴美子・福島孝行の各氏には、お名前を記して感謝の意を表したい。

(こやま・まさと=当センター調査第2課総括調査員)

- 注1 小山雅人「弥生勾玉の分布とその変遷」(『究班』(埋蔵文化財研究会15周年記念論文集)埋蔵文化財研究会)1992、25~32頁
- 注2 小山雅人「近畿地方の弥生勾玉」(『京都府埋蔵文化財情報』第46号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1992、12~26頁
- 注3 飯牟禮洋子「C地区ヲーb検出の方形周溝墓と勾玉」(『四葉地区遺跡 平成6年度年報』板橋区四葉遺跡調査会)[1994?]、36~37頁、写真図版6、表紙4
- 注4 小方泰宏『岡遺跡』(九州縦貫自動車道関係文化財調査報告16・北九州市埋蔵文化財調査報告書第82集(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室)1989、75頁、第52図、図版19
- 注5 『田原本町埋蔵文化財調査年報』4 1992・1993年度(田原本町教育委員会)1994、18~20頁
- 注6 大きさによる勾玉の分類について、小山雅人「超大型の弥生勾玉」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1996、137~144頁を参照。
- 注7 『発掘速報展 平成14年度の調査成果』(田原本町教育委員会)2003、4~5頁
- 注8 新潟県刈羽郡西山町のホームページによる。
- 注9 湯村功《ヒスイ勾玉》(インフォメーション)、<http://www.z-tic.or.jp/site/page/yayoi/aoya/info/haiken/040724/>
- 注10 森貞次郎「宇木汲田遺跡-(7)勾玉」(『末盧国』六興出版)1982、320頁、第162図4
- 注11 坂田邦洋「長崎県根獅子遺跡の発掘調査」(『考古学ジャーナル』79)1973、図6
- 注12 『文化財発掘出土情報』2003.12月号 巻頭グラビア
- 注13 注2文献、17頁
- 注14 注6文献、11頁。この資料の出土状況等について、京都府教育委員会の藤井整氏を通じ、田原本町教育委員会の豆谷和之氏からご教示を得たことに感謝します。
- 注15 金関丈夫「島根県八東郡古浦遺跡」(『日本考古学年報』16)、昭和36年度
- 注16 『弥生の環濠都市と巨大神殿』(池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会)1996、vii、23頁
- 注17 瀬川芳則ほか『高宮八丁遺跡-石器編』(寝屋川市文化財資料11、寝屋川市教育委員会)1988、253頁、図版6・82
- 注18 『鬼虎川遺跡出土遺物にみる弥生人の暮らし』(東大阪市郷土資料館)1983、4頁
- 注19 『速報 国道163号線道路拡幅工事 木間池北方遺跡・城遺跡-発掘調査途中経過報告をかねて-』(四條畷市立歴史民俗資料館展示室)2004、1~2頁
- 注20 菅原章太・横原美智子ほか『鬼虎川遺跡第44次発掘調査報告』(東大阪市教育委員会)2000、

- 72頁、第55図、巻頭図版
- 注21 近藤義行ほか『芝ヶ原古墳』（城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集 城陽市教育委員会）1987、22頁、第26・27図
- 注22 『市田齊当坊遺跡』（京都府遺跡調査報告書第36冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2003、図版第217・221
- 注23 引原茂治「三山木遺跡第4次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第103冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002、91頁、第65図86、図版第44
- 注24 岡崎研一・田代弘ほか「南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第103冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002、29頁、第22図177、図版第13
- 注25 西谷正「朝鮮先史時代の勾玉」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上）1982、187～202
- 注26 八瀬正雄『福知山市文化財調査報告書』第26集（福知山市教育委員会）1994、26頁
- 注27 石野博信・村川行弘ほか『田能遺跡発掘調査報告書』（尼崎市文化財調査報告書第15集 尼崎市教育委員会）1982、447頁、第143図、図版第72
- 注28 梅原末次「港村函石浜石器時代ノ遺跡」（『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府）1920、160～162頁
- 注29 田代弘「奈良谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第60冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1994、178頁、第152図7
- 注30 松浦俊一・内田律雄ほか『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1980、第43図2
- 注31 近藤義郎編『楯築弥生墳丘墓の研究』（楯築研究会）1992、89頁、第73図下段四、図版第54。小山雅人、注2文献、18頁・第4図参照。
- 注32 河野一隆・野島永「奈良岡遺跡（第7・8次）」（「国営農地（東部・西部地区）関係遺跡平成8年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第76冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1997、59頁、第58図I、巻頭図版右下
- 注33 大賀克彦ほか「奈良岡遺跡再整理報告(1)－翡翠・ガラス製品－」（『京都府埋蔵文化財情報』第95号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2005、6頁、第3図
- 注34 同上文献、3～4頁、第1図4
- 注35 今田昇一・肥後弘幸ほか『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』（京都府大宮町文化財調査報告書第14集 大宮町教育委員会）1998
- 注36 今田昇一・肥後弘幸ほか『左坂古墳（墳墓）群G支群』（京都府大宮町文化財調査報告書第20集 大宮町教育委員会）2001
- 注37 平良泰久・黒田恭正ほか『丹後大山墳墓群』（京都府丹後町文化財調査報告書第1集 丹後町教育委員会）1983
- 注38 白数信也ほか『大風呂南墳墓群』（岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会）2000
- 注39 竹原一彦・河野一隆「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」（「国営農地（丹後東部地区）関係遺跡平成9年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第84冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究セン

- ター) 1998
- 注40 高橋あかね・石崎善久「金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第66冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注41 岡林峰夫・石崎善久・三好玄『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第24集) 2004
- 注42 釋龍雄ほか『坂野』(京都府弥栄町文化財調査報告第2集) 1979
- 注43 野島永・高野(野々口)陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓」(1)~(3)(『京都府埋蔵文化財情報』第74・76・83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999~2002
- 注44 木下尚子「弥生定形勾玉考」(『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』中) 1987の番号: 27・25・28・23、永島暉臣慎・田中清美「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」(『月刊文化財』266) 1985。小山雅人、注2文献、20~21頁・第5図参照。
- 注45 小山雅人、注2文献、19~20頁
- 注46 金関丈夫「魂の色-まが玉の起り」(『考古と古代 発掘から推理する』法政大学出版局) 1982、28~33頁。短い文章であるが、勾玉の起源・本質についてきわめて重要な論考である。動物の歯牙が勾玉のルーツであること、緑というその色が魂の色であることなど非常に説得力のある論旨が展開されている。なお、所謂「魏志倭人伝」の「青大句珠」の「句」は「勾」の間違いとされることが多いが、「句」は「勾」の本字であり、本来L字形の鉤かぎを意味する漢字で、「勾玉」や「曲玉」以上に、勾玉の本質を言い当てた表記と言えよう。
- 注47 小方泰宏、注5文献、89~90頁